

協働学習を主眼とした大学間連携の英語発表イベントによる教育効果
ー C L I L（内容言語統合型学習）を利用した取り組みの紹介ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二五, 義博, NIGO, Yoshihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000105

【実践報告】

協働学習を主眼とした大学間連携の 英語発表イベントによる教育効果 —CLIL（内容言語統合型学習）を利用した 取り組みの紹介—

二五 義博

1. はじめに

広島県内の各大学では、2009 年度より、大学間が連携して英語での口頭発表やパフォーマンスを行う OPP(Oral Presentation & Performance)と呼ばれるイベントを毎年開催してきた。これは、それぞれの大学において教員の指導の下、参加学生が協働学習に基づく創作活動を行い、その成果を持ち寄って毎年1回発表し合うというものである。このイベントには、教師側としてはオーラル・イングリッシュの指導技能の向上と教員間の情報共有、学習者側からはオーセンティックな発表の場を通じた学習者同士の連携と日常の学習活動への活用という二重の目的がある。海上保安大学校はこの OPP イベントに毎年自主的な参加者を募り、その参加学生たちは英語教員の指導・助言を受けながら通常数か月にわたる課外での取り組みを通して、2012 年度より継続的に参加してきた。

本実践報告の目的は、海上保安大学校の過去の OPP への取り組みを簡単に紹介しながら、特に CLIL（内容言語統合型学習）の視点を取り入れた 2014 年度の事例に焦点を当て、CLIL の 4 つの軸でもある「内容」「言語」「思考」「協学」の側面からどのような教育効果があったかを明らかにすることである。まず、理論的背景として、OPP 活動で重要な意味合いを持つ協働学習に加え、ヨーロッパの CLIL についても触れる。次に、実践面としては、「内容」では警備や救難等のオーセンティックなテーマ、「言語」では海事英語の習得、「思考」ではクイズ形式など考える活動、

「協学」では準備段階や発表当日の学び合いを中心に検討する。最後に、学生の反応については、大学間の OPP 活動全体の調査結果を踏まえながら、海上保安大学校が独自に行った聞き取り調査の自由記述も入れて総合的にデータの分析を行う。

2. OPP 大会への参加

2012 年度から 3 回、海上保安大学校が OPP イベントに参加した人数、タイトル、発表概要は以下の通りである。

①第 4 回（2012） 7 名参加

“The Sea, Men and Japan Coast Guard Academy”

（海と男と海上保安大学校）

⇒大学校での日常生活や訓練、将来の海上保安官としての仕事内容

②第 5 回（2013） 8 名参加

“Only Spirit! Japan Coast Guard Academy:“If”at sea is 118”

（ひたすら気合！海上保安大学校～海のものもは 118 番～）

⇒大学校での日常生活（学業、訓練、寮生活、部活動など）、年間の主な行事、そして将来の海上保安官としての仕事内容

③第 6 回（2014） 9 名参加

“Justice and Humanity : Defenders of the Ocean”

（正義・仁愛～海を守らむますらおたち～）

⇒「海上保安業務の紹介」と「海でのもしもの時に役立つ海の安全教室」をパワーポイントで発表し、逮捕術・搬送法などの実演

以上の 3 回の発表内容を要約すると、口頭発表およびパフォーマンスの手段で、主に英語での大学紹介や、視覚や身体を利用した海上保安業務の実演を行っており、協働学習や CLIL の視点を取り入れている。

3. 理論的背景

3.1 協働学習

協働学習の基盤となる考えは、Vygotsky (1978) の「発達の最近接領域」の概念により示されたが、これは、1人では到達できないレベルでもグループで助け合ってそれを可能にするというものである。その後、Long and Porter (1985) は第2言語教室でグループによるインタラクティブな活動を含むことの効用を強調し、Oxford (1997) は言語学習における協働学習の利点として、内発的動機づけの促進、自尊心の高揚、思いやりのある利他的な関係の創造、不安や偏見の軽減などを挙げている。ここで重要なのは、協働学習とは単に人が集まってグループで行う学習のことではないが、Johnson, Johnson and Smith (1998) はその明確な定義を示している。彼らの言う望ましい協働学習の5つの基本原則とは、①肯定的相互依存（＝グループ全員が成功を喜びあって学習効果を最大限にする）、②促進的相互交流（＝互いの目標達成への努力を支援・促進する）、③個人と集団の責任（＝各自が集団に貢献する責任を公平に分担する）、④集団作業スキルの発達（＝対人関係や小集団での社会的技能を養成する）、⑤グループの改善手続き（＝協働活動の評価および建設的意見の交換をしていく）である。協働学習が単なる人の集まりによる良好な関係の学習と考えないのは、多重知能理論を提唱した Gardner (1993 ; 2006) も同様である。Gardnerによれば、人間の持つ8つの知能うちの1つである「対人的知能」は、脳の高度な働きとも関わる知能の一種として、他人との相互作用を通して情報処理や問題解決していける能力のことである。ゆえに、対人的知能を生かす協働学習においては、明確な達成目標とそのための建設的な意見交換が必要であると考えられている。

3.2 CLIL（内容言語統合型学習）

Coyle, Hood and Marsh (2010,p.1)によれば、CLIL（Content and Language Integrated Learning）とは二重に焦点の当てられた教育的アプローチであり、その比重の置き方は様々であるが、内容と言語の両方の習得を目指す学習法である。CLILは、外国語の効果的な習得方法として

ヨーロッパ各国ではすでに浸透しているが、最近ではアジアの国々でも一部取り入れられつつある。従来のイマージョンなどとは異なり、CLILには4つの明確な指導法の柱があるのが特徴的である。それは4つのCとも呼ばれているが、先の「内容（Content）」と「言語（Communication）」に加え、「思考（Cognition）」と「協学（Community）」である。大学レベルでCLILを考えるならば、専門的分野のオーセンティックな内容を英語の学習活動に取り入れることにより、学習者の知的好奇心を刺激し、思考活動や協働学習を伴うより質の高い学習者主体の英語教育が可能になるという利点がある。さらには、CLILでは内容や言語を理解するための様々な形の足場が用意されており、文字だけではなく、音声、写真や映像などの情報も豊富に提供される。

4. CLILを活用した海上保安大学校の実践（2014年度の事例）

4.1 「内容」（Content）

発表の内容については9名の学生が自主的に集まって話し合いで決めたが、その結果、“海上保安業務”というかなり専門的な内容となった。これは、言語習得の際に教科内容や専門分野を活用することを主眼とするCLILの概念に合致するものであった。海上保安業務と一口に言ってもいろいろな種類があるが、今回はその中でも代表的な逮捕術（写真1）と救助（写真2）および搬送法（写真3）を取り上げた。

前回の発表では内容面が不十分だったという反省に基づき、今回は海上保安業務に関する調査をより綿密に行った。具体的には、海上保安庁の発行している報告書等（英語版も含む）で発表に関連する情報を探したり、すでに乗船経験や勤務経験が豊富な先輩たちに聞き取り調査を実施したりした。この調査は、CLILでいう内容知識の習得を目指すものである。海上保安大学校においては、本科（一般大学の1～4学年）の他に特修科と呼ばれる学科があって、すでに勤務経験のある20代後半から30代前半の研修生も同じ寮で生活をしながら学んでおり、そういった人たちに業務内容について気軽に聞けるのが利点である。以上のような内容への綿密な調査により、今回の発表では、逮捕や救助についての英語の説明やパフォ

ーマンスをより実際に近い形で行い演ずることが可能となった。ここではまさに、CLILの重要な要素の1つでもある「内容のオーセンティックさ」が追求されているのである。

4.2 言語 (Communication)

海上保安庁の幹部養成機関である海上保安大学校では、海上での国際共通語としての英語の重要性がますます高まっている。なぜなら、海上保安業務の国際化に伴い、不審船や密輸船への立入検査、外国人の逮捕、あるいは日本近海での外国人負傷者の救助の際などに英語を使用する場面が確実に増えてきているからである。つまり、違法者であれ負傷者であれ、外国人に対処するときにはますます英語でコミュニケーションをとらなくてはならなくなっているからである。

こういった専門分野での言語取得の必要性を踏まえ、今回の発表において学生たちは、救助・搬送や逮捕についての説明文を英語で作成することとした。また、パフォーマンスの場面は、動作に合わせた英語セリフを付与していったが、逮捕に関しては、学生の提案で臨場感を出すため一部日本語で演じることにした。実際に、OPP 大会への参加を通して習得を目指した、場面別の使用言語の例は以下の通りである。

- 逮捕の場面 (poaching, corals, smuggling, exclusive economic zone, arrestment art, suspicious person・・・)
- 救助・搬送の場面 (gale warning, offshore current, casualty, artificial respiration, cardiopulmonary resuscitation (心肺停止の蘇生救急)・・・)

ここで、彼らは将来に役立つ離岸流などの海象や人工呼吸に関連する専門用語も多く学べ、まさに CLIL のいう言語使用をしながら難解な語の定着を図ることができたのである。反面、口頭発表において専門用語が多く出てくると、聴衆にとっては英語を理解しにくい。そこで、例えば救助では、細かな場面別に写真をあらかじめ撮ってパワーポイントに映し出しな

がらそれに合わせて会話や演技をした。CLILの具体的な指導法では、理解のために映像や写真をはじめとする視覚情報も有効に活用することが推奨されているのである（写真1・2・3参照）。



写真1 逮捕（不審者を尋問し取り押さえる）の場面



写真2 救助（海での負傷者の状態確認）の場面



写真3 搬送（症状確認後、安全な場所へ）の場面

4.3 思考 (Cognition)

CLILの重要な軸の1つでもある思考の要素としては、逮捕、救助、搬送の場面ごとに三択式等の英語クイズを導入した。これは、発表を聴衆の参加型にする（聴衆に場面別に考えてもらう）ことにより会場との一体感を持たせるのが目的ではあったが、準備段階においては学生に「考える」という機会を多く提供するためでもあった。今回のクイズは、全て学生たちの手作りである。学生たちが自ら話し合っ、聞き手の知的好奇心を刺激するようなクイズの質問や解答を考え、英文を助け合っ作り、教員は最終段階で文法ミスなどの添削という形でのみ関わった。CLILの指導では、専門分野に関わる内容を題材としてそれに密接に関わる言語表現を学ぶだけでなく、内容や言語の習得の過程により多く思考の活動も含むことが重要なのである。2014年度の発表で使用した海上保安クイズの例は以下の通りである。

Q. Which do you think is true?

1. JCG officers can arrest criminals as the police officers can do.
2. JCG deals with poaching of the corals by Chinese poachers in Ogasawara.

Q. How many officers can become Rescue Divers of all the Japan Coast Guard officers?

1. 15% 2. 1% 3. 5%

*JCG: Japan Coast Guard

4.4 協学（Community）

CLIL という協学（Community）は、ヨーロッパ的共同体の概念と密接に関連しているものである。スイスの場合では、それは多言語社会の community 内で言語・文化的に背景の異なる人たちとも協力してやっていく姿勢のことを指す。協学（Community）には様々なレベルがある。渡部・池田・和泉（2011, pp.8-9）によれば、community とは、席の前後左右の生徒→教室→学校→近隣→市町村→都道府県→国→地域→地球全体の全てを含む概念のことである。これを OPP に当てはめてみるならば、狭義には「教室内での言語使用やコミュニケーションの機会を増やすための協働学習」、広義には「大学間で連携して行う OPP イベント全体としての協働学習」ということになる。

次に、前提として、海上保安大学校における協学の環境について考えてみたい。海上保安大学校では将来の海上保安業務も見据え、1年生の時から勉学や訓練などあらゆる場面で協力して行うことが教え込まれている。それは、救助や逮捕において単独ではなくチームとして動くことが重要と考えられるためである。そもそも、海上保安業務は命にも関わるようなハードなものも多いため、個々人が別々に動いていたのでは大きな危険を伴うこともある。また、日々の寮生活（全寮制）では、上級生が下級生を指導する形での協力体制ができ上がっている。したがって、CLIL の協学という柱は海上保安大学校の学生にとっては大変馴染みやすいといえる。

最後に、OPP に向けての準備、および OPP 当日や事後における協学に

ついて考察してみる。今回の発表の場合には、発表テーマや目標の決定、できる限り平等な役割の分担、業務内容の調査、スピーチやパフォーマンスの構想、英文の作成と相互のチェック、クイズの考案から当日の発表、さらには事後の来年度に向けての反省会に至るまで、同学年同士、あるいは2年生と1年生の協学が上手く機能していたようである。この点からは、教員がほとんど口出しする必要がなく、学生同士が主体的に協力していたことが分かり、それが海上保安大学校の大きな特徴の1つでもある。Johnson, Johnson and Smith (1998) の協働学習の定義を引用するならば、少なくとも発表テーマや目標の決定は「促進的相互交流」、できる限り平等な役割の分担は「個人と集団の責任」、来年度に向けての反省会は「グループの改善手続き」に当てはめることができる。

5. 参加者の反応についての考察

5.1 OPP 全体での調査結果

まず、大学間の OPP 活動全体の調査結果を踏まえる目的で、岩井・三熊・平本・二五・三宅・山中・吉本・堀部 (2016) を参照することとする。岩井他 (2016) では、2014 年度の OPP に関して事後アンケートを実施し、回答者 63 人の自由記述の分析を行っている。その処理方法は、記述内容ごとにコードを付与し、コードごとに比較してカテゴリーに分類していくというものである。質問項目としては、1) 英語学習の方法を工夫するようになったかどうか、2) OPP での発表に向けた授業／活動の練習でよかったこと、3) OPP での発表に向けた活動や練習で改善が必要だと思ったこと、4) 本番の OPP でよかったことの4つがあったが、ここでは本研究の視点とも関連の深い2)と4)を取り上げることとする。

図1からは、OPPの事前準備で良かった点として、大半の参加者が「協働学習による創作活動」についてコメントしていることが分かる。各大学により、プレゼン、ドラマ、ミュージカル、チャンツ、その他パフォーマンスと出し物は異なるものの、チームの仲間とアイディアを出し合い、一定期間共に練習し、協力して1つのものを作り上げていったことが参加者にとって一番印象に残ったようである。将来の業務の実演をした海上保安

大学校についても言えることであるが、協働は内容と言語の両面において行われており、その意味では CLIL 的であるといえる。また、図 2 から OPP の本番で良かった点については、「他大学の発表」と「達成感、自信などの心理面」に関わるコメントが最も多く、次に「仲間との連携」や「楽しさ」などへのコメントもいくつかあった。とりわけ、「他大学の発表」について詳しく見ていくと、「他大学による発表に刺激を受けた」、「他大学生とイベントを通じて交流できた」や「他大学の英語学習方法が自分たちにも参考になった」などの意見があり、これらは広い意味で、イベント会場における大学間の協働学習と捉えることもできる。すなわち前述したように、準備段階と当日の 2 つのレベルにおいて協学が行われたといえよう。

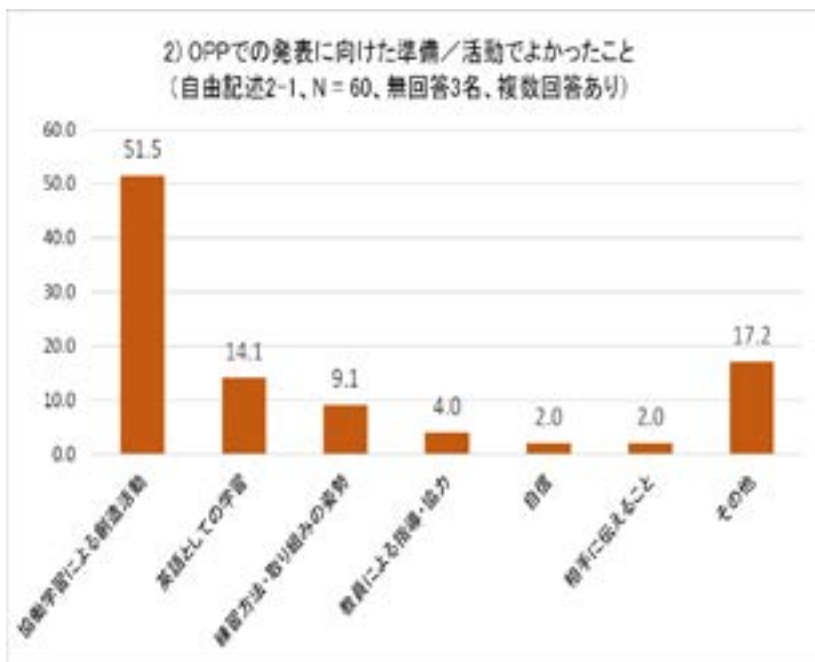


図 1 OPP の事前準備で良かった点

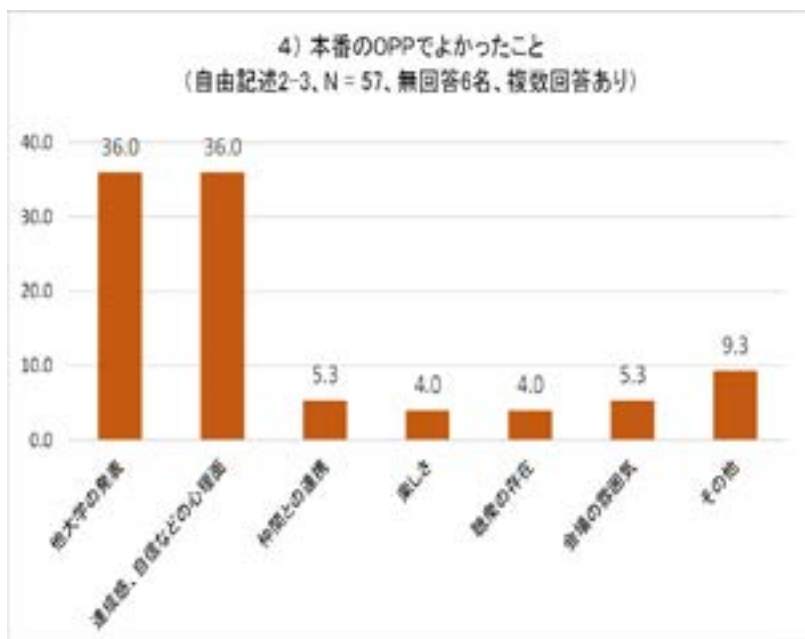


図2 OPP イベント当日で良かった点

5.2 海上保安大学校での調査結果

OPP 全体の調査と並行して、2012 年度より海上保安大学校では独自の調査を行ってきた。調査方法としては、2012 年度（回答者 7 名）と 2013 年度（回答者 8 名）においてはイベント後にアンケートへ自由記述で記入、2014 年度（回答者 9 名）においては個別に聞き取り調査を実施した。対象人数が少ないこともあり、2013-14 年度の調査結果について、大まかには「良かった点」と「課題点」に分け、前者については本研究のテーマである協働学習や CLIL に多少なりとも関連すると思われるコメントはさらに別項目に分類し、以下に個別の学生の反応を紹介することとする。

<良かった点>

- 他大学の発表を見ることができ、どのような発表をすればよいか参考になった。

- 他大学に行き、学生と触れあうことで見聞を広げることが出来たと思う。
- 声を出せばパフォーマンスも盛り上がるし、演じる側としてもやりやすい。
- 自分たちの生活を英語で説明することができたことは、実際に外国人などとコミュニケーションをとるためのいい経験になりました。自分が思っている以上に、英語で説明するときにジェスチャーが有効だということも分かりました。
- スムーズにプレゼンを行うことができた。
- 劇などをする大学も多かったですが、特徴ある大学校なので、大学校の生活を説明する内容は良かったと思います。映像や実演を交えた発表にしたおかげで、聞いている人も退屈ではなかったのではないかと思います。来年もただしゃべるだけではなく、実演などもたくさん盛り込んでいけばいいと思います。

<協学や CLIL に関連するコメント>

- 今年は紹介の文の量も長く、パフォーマンスも多く取り入れたので良かったと思います。来年も2学年の経験者を1年と共につけ、発表にのぞむことが良いと考えられます。
- 2年生として2回目であったが、昨年よりも良いものが出来上がったと思う。1年が自主的であったので大変良かった。
- お互いに改善点を挙げ、真剣に取り組み良いプレゼンテーションを行うことができました。
- 言葉だけでなく将来従事する海上保安業務のこともよく分かった。
- 海事関係の英語の専門用語が身についた。
- クイズをいろいろ考えて作ったのは面白かった。
- 1年生と2年生がうまく協力してできたのでとても達成感がある。

<課題点>

- 説明に重点を置きすぎたため、感情を込めるということがいまいち

できていなかったと思います。今後は感情を込めやすい発表方法を考えてみるのもいいかと思いました。

- もう少しリハーサルをしたら、プレゼンを魅力的にできたのではないかと思う。
- 実演をする上では、会場の様子などが事前にわかれば、見やすさなども考えられるのではないかと思います。
- もう少し練習しておけば、さらに良い発表をすることができたと思う。分かりにくい点を見つけてその点について詳しく説明する、英語をていねいなものにするなど。

OPP イベントへの参加から得られた一般的な利点としては、「他大学の発表が勉強になったこと」、「見聞が広がったこと」、「大きな声を出すことの重要性」、「コミュニケーションをとる際のジェスチャーの重要性」、「映像や実演を交えた聴衆を退屈させないための工夫」などへのコメントがなされた。加えて、協学や CLIL に関連しては、「1年生と2年生の協力体制」、「協働での改善の試み」、「海事関係の内容と言語の同時習得」、「クイズでの思考」などを指摘する声があった。その一方で課題点としては、「感情を込めることの難しさ」や「リハーサルや練習の不足」などが挙げられた。

6. おわりに

研究の結果、CLIL の視点の活用により、イベントの準備期間およびその前後を含む短期的ではあるが、4つの軸を中心に一定の教育効果が見られた。すなわち、学習者は協働での学びを通じてお互いを刺激し合い、考える活動では知的な興味を高めながら、将来に役立つ専門分野の内容とそれに密接に関わる言語の同時習得も目指すことができたのである。より具体的には、以下の4点を本稿のまとめとしたい。

- ① 「内容」では、綿密な事前調査により、逮捕や救助等のオーセンティックなテーマで発表できると同時に、将来に役立つ海上保安業務について

の知識も習得できた。

- ②「言語」では、OPP での実際の言語使用を通じて海事の専門用語の習得を図ることができた。
- ③「思考」では、クイズ形式の活動を通じて数多くの考える場が提供された。
- ④「協学」では、OPP の準備段階と発表当日の両レベルにおいて、海上保安大学の学生同士または他大学の学生との間で、英語による学び合いがうまく機能した。

今後の課題としては、過去3年間の海上保安大学のOPPへの参加者は延べ24名とまだ少ないので、今後調査を継続し、対象者数を増やしていくことが必要である。その一方で、すでにOPPに参加した学生に関しては、より長期的な視野から、イベント参加後に英語学習への動機づけが高まっているか、海事に関する内容知識や専門用語の定着が見られるか、さらにはイベントをきっかけにTOEICなどの受験を通じて一般的な英語力の向上へと結びついているかなどを調査する必要があるであろう。

謝辞

本研究は科学研究費（26370648）の助成を受けた研究の一部である。

「英語のオーラル・プレゼンテーション活動を通じた協働学習の理論構築とその効果の検証」（平成26年度～）

参考文献

- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gardner, H. (1993). *Multiple intelligences: The theory in practice*. New York: Basic Books. 黒上晴夫監訳（2003）.『多元的知能の世界—MI理論の活用と可能性—』大阪：三晃書房.
- Gardner, H. (2006). *Multiple intelligences : New Horizons*. New York: Basic Books.

- 岩井千秋・三熊祥文・平本哲嗣・二五義博・三宅美鈴・山中英理子・吉本和弘・堀部
秀雄 (2016). 「Oral Presentation & Performance (OPP) のイベントを通じた
協働学習活動とその教育効果の理論化」『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』,
第13号, 1-18.
- Johnson, D.W., Johnson, R., & Smith, K. (1998). *Active learning: Cooperation in the
college classroom*. Edina, MN: Interaction Book Company.
- Long, M.H., & Porter, P.A. (1985). Group work, interlanguage talk, and second
language acquisition. *TESOL Quarterly*, 19(2), 207-228.
- 二五義博 (2015). 「Justice and Humanity : Defenders of the Ocean (正義・仁愛～
海を守らむますらおたち～」) 『OPP2014 Event Report』, OPP 研究会報告書,
29-34.
- Oxford, R. (1997). Cooperative learning, collaborative learning, and interaction.
Modern Language Journal 81: 443-56.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological
processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011). 『CLIL(クリル) 内容言語統合型学習 上智大学外
国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』東京：上智大学出版局.